

伝道ブックス  
86

念仏は人間に何を与えるのか

一楽 真

表紙デザイン  
ツールボックス

# 目次

はじめに.....	1
一 仏との出遇い.....	3
■阿難に起こった出遇い.....	4
■出遇いの難しさ.....	16
二 阿弥陀仏との出遇い.....	21
■「阿弥陀」の名を勧める釈尊.....	23
三 称名念仏の意義.....	38
■法然上人がかけた専修念仏(ただ念仏).....	40
四 呼びかけとしての称名念仏.....	49
■諸仏の称名.....	50
五 念仏の利益.....	63
■仏の呼びかけが開く生き方.....	63
■真の仏弟子.....	68
おわりに.....	75
あとがき.....	78

【凡例】

- ・本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部）発行の『真宗聖典』を指します。
- ・引用文中の傍線は筆者によるものです。

## はじめに

新型コロナウイルスが感染拡大する中、あちらこちらで訊かれたことの一つに「仏教は、この現実問題にどう応<sup>こた</sup>えるのか」ということがありました。これは、この病気をどうにかしてくれないかということを期待する声であるわけです。しかしながら、それだけではなくて、こういう問題に仏教はどう応答するのかという問いでもあります。

そのような中で、法然<sup>ほうねん</sup>上人<sup>しょうじん</sup>（一一三三～一二二二）、親鸞<sup>しんらん</sup>聖人<sup>しょうじん</sup>（一一七三～一二六二）が本当に大事になさった「南無阿弥陀仏」、念仏申すという教えが、昨今、甚だわかりにくくなっているということがありま

す。これらの課題を踏まえ、私なりに、念仏申すとはどういうことなのか、「南無阿弥陀仏」は我々人間に何を与えるのかということを考えてほしい、「念仏は人間に何を与えるのか」という題を出させていただきました。

口に「南無阿弥陀仏」を称となえても何にもならない。こういう批判すらお寄せいただくことがあります。そのような中で、親鸞聖人は「南無阿弥陀仏」をどう考えていたのか。これをあらためて尋ねてみたいと思います。

## 一 仏との出遇い

まず、「仏ぶつとの出遇であい」ということについてお話をさせていただきます。これはどういうことかと言いますと、念仏ねんぶつというのは「仏ぶつを念おもう」「仏を念おもずる」という字を書きますが、果たして仏を知っているのかという問題なのです。仏を知らずに仏を念おもうことはできないわけです。ところがよくよく考えてみますと、「南無阿弥陀仏」と称となえることもそうですが、仏に遇あったこともないにもかかわらず、私は仏を念おもじていますとか、仏を信じていますとかということをおっしゃる方があります。それはどういう仏を信じておられるのか。どういう仏を念おもじておられるのか。そこを確

かめないとそもそも念仏ということ自体が成り立たないということを親鸞聖人は教えてくれていると思います。

ですから結論的なことを言いますと、口で「南無阿弥陀仏」という発音をすれば念仏だということにはならないということです。そこに念おもわれている仏は、本当の仏なのかということがあります。こういう問題が念仏の前提にあるのです。

### ■阿難に起こった出遇い

一つの例として、お釈迦様の弟子でありました阿難あなん（アーナンダ）のことをご紹介したいと思います。

大谷大学の響流館こうりゅうかんという建物を入ったところに、本校の卒業生でもあります畠中光享はたなかこうきょう先生の絵が掛けられています。ゴータマ・ブツダが歩きになっている絵で、ブツダの後を歩いているのが阿難です。いつもお釈迦様に随したがって旅のお供をしていたという方があります。旅のお供をしていますので、お釈迦様がお話をされる時にはいつも隣にいるわけです。ですから、阿難は一番お釈迦様の説法を聞いた人として「多聞第一たもん」（多く聞くこと右に出るものはない）の弟子というふうに言われています。ところが阿難は、お釈迦様のお心になかなか気づけないのです。どういふことかと言うと、お釈迦様があまりにも立派でしたので、阿難は、自分は到底及ばないと思っていたのです。

お釈迦様は、誰もが迷いを超えて生き生きと生きる道を説こうとしています。人間が迷い苦しむのには法則がある。それを超えていくにも法則がある。その法則を見出されて説いておられたのがお釈迦様なのです。ですから、お釈迦様は個人的な能力で覚ったとか、経歴がすごいとか、そういう話では全くないわけです。

にもかかわらず阿難は、お覺りを開くなんていうのは自分には夢のまま夢だ、到底及ばない、仏陀ブツダになんかなれるはずはない、こういうことをずっと思っていたのです。ですから、お釈迦様がいくら「あなたも仏になるんだよ」と呼びかけてくださっても、私は無理だと思っていたわけです。

これは、人間的には謙虚かもしれませんが。「俺も仏になるんだ」と言うよりは、「私なんか到底無理です」と言うほうが謙虚な話かもしれませんが。しかしそれは、お釈迦様からすれば、「ああ、阿難にはまだ通じないか。まだわかってもらえないか」という思いをずっと抱えておられたと言えます。

そのような阿難があらためてお釈迦様に出会い直し、その本当のお心に気がついたということを書いているのが、『仏説無量寿経』ぶつせつむりょうじゆききやう（親鸞聖人は「大無量寿経」と呼びます）です。親鸞聖人は、『教行信証』きやうぎやうしんしやうの「教卷」きやうのまきに次のように引いておられます。